

二十一世紀における教会論の可能性

丸 山 忠 孝

目 次

序 「改革された教会は常に改革されなければならない」	86
1 教会論成立にとっての否定的状況	88
2 ポストモダンの教会論に向けて	92
3 ポストモダンにおける福音主義教会論?	98

(本論は、二〇〇六年十二月二〇日にアジア神学協議会 日本地区研修会において行った講演原稿に基づき、本誌掲載のため一部手直しを加えたものである。なお、切迫して講演依頼を受けたことや論者の北米在住という地理的制約などのため本論は米英のプロテスタント関連資料を限定的に用い、邦文を含むその他の資料を用いていない。さらに、二十一世紀はまだその初頭にあり、本論が用いるポストモダンという呼称自体が確定した時代や文化であるよりは過渡的なものを指し示すことから、本論の性格も中間発表ないしは事例研究の類となった点で読者の理解をいただきたい。)

序 「改革された教会は常に改革されなければならぬ」

(*Ecclesia reformata semper reformanda est*)

キリスト教二千年の歴史において、今日ほど時代の挑戦を受けたキリスト教会の対応が急務であると叫ばれている時代もめずらしい。もちろん、今日の挑戦はコンスタンティヌス帝によるキリスト教公認、十六世紀のプロテスタント宗教改革、近代国家誕生を歴史に刻印したスランクス革命、二十世紀の世界教会協議会の設立や第二バチカン公会議が教会に及ぼした広範囲かつ長期的な影響に比べれば限定的であろう。しかし、教会への外面的影響はともあれ、内面的影響に関しては、ポストモダンと呼ばれる現代の教会への浸透は顕著であり、その結果、「教会は常に改革されなければならない」という声は世界的に聞かれることになる。

オットー・デイベリウスがその著を『教会の世紀』(一九二七)と題したことに象徴されるように、二十世紀は教会への関心において世界的高揚を見た^①。とりわけ、世紀初頭から一九七〇年代にかけて、諸教会間の相互理解の前進、K・バルトの『教会教義学』に代表される神学的洞察、新約学、教父学、教会史学などの分野での貢献もあり教会理解の深化と多様な教会論の展開が見られた。同時に、そこにはニカイア・コンスタンティノポリス信条の「一つの、聖い、公同の、使徒的教会」という理想を指向する集合的教会理解の基本があった。西方のローマ・カトリック教会とプロテスタント諸教会および東方正教会間の対話、エキュメニカル運動の成果としての世界教会協議会の設立、「キリストの神秘体」という教会理解を基本とした第二バチカン公会議の教義憲章『諸民族の光』、福音主義陣営からの『ローザンヌ誓約』などはこのような集合的教会理解の表現であった。しかし、一九七〇年代以降に世界的潮流となるポストモダン時代の到来に至り、教会理解の転換が顕著に見られることになる。ポストモダンがモダンが前提とした普遍性、合理性、構造的性など

を否定し、普遍に対する個、合理性に対する人格性、社会性に対する個性を強調したことから、教会理解に
関しては「集合」に代わって「多様」が基本となり、諸教会のあるがままが是認され、その上に多様な教会
論が築かれることになる。その結果、教会改革理念においても、時代への教会の対応は単なる「変化」
(change) から継続的な「改革」(reform)、さらにより抜本的な「変換」(transformation) や「改変」
(conversion) まで多様に表現されることになる。^②

本論の標題にある「教会論」は、厳密には聖書学に基づく教義学、教会史学、宣教学などの学際領域であ
り、そこでは過去の学的伝統を踏まえつつ新時代の研究成果を反映せざるをえない。このような「教会論」
が学として成り立つ上には、多様な教会理解を反映するだけではなく、現状への該当における普遍性が求め
られよう。この意味において、本論はポストモダンにおける「教会論」の可能性を問うのであるが、一般論
としてそれが成り立ちにくい時代であることは自明であろう。しかし、あえて論を進めるにあたり一つの示
唆となりうるものに、プロテスタント宗教改革が十六世紀後半の困難な時代に直面する中から生じた一つの
標語があると思われる。これは、宗教改革がルター派、リフォームド、急進派、英国国教会などに分かれ、
トリエント公会議による体制建て直しを経たカトリック教会からの挑戦を受けて守勢に立つ中で、ジュネー
ヴのカルヴァンの後継者テオドール・ベザあるいはそのサークルの中から生じた、序論の標題に用いたもの
である。この標語から「改革された」(reformata)を抜いた形のものが後代に流布し、また、それが今日の
ポストモダンの脈絡においても多用されることになる。しかし、本来の標語においては過去にみことばに基
づいて改革された教会における継承としての改革を意味したものである。それゆえ、過去の改革という伝統
を担う教会の改革には教会理解における継続性、規範性、方向性などが問われることになる。この視点抜
きの教会論の構築は「常に改革されなければならない」という命題を満たしうるとしても、時代に対する証

言を二千年続けてきたキリストの生命体としての教会に相応しいものとは言えないのではなからうか。

1. 教会論成立にとっての否定的状況

いずこであれ教会があるところには、その自己理解に基づく教会論が成り立ちうることは自明であり、よって「諸教会論」が現実的であることは否定できない。しかし、聖書が教会を「キリストのからだ」、キリストを「教会のかしら」とする有機体としての教会理解を基本とし、そこに普遍性と個別性を同時に認めるのであれば、普遍をリアルなものであるよりは名目上のものとし、個々の教会のリアリティーから教会理解を起こす教会唯名論の立場に立つポストモダンの今日は、教会論形勢にとって否定的状況下にあると言わざるをえない。この状況への貢献要因は多くあるが、ここではポストモダンにおける (1) 欧米に見られる脱キリスト化と教会の退潮現象、(2) 伝統的教会論批判、(3) 神学における教会論の多様化と混乱の三点に絞って言及する。

(1) 欧米社会とその文化は伝統的にキリスト教的とみなされてきたが、ポストモダン時代にいたり「キリスト教ばなれ」、「教会ばなれ」に代表される脱キリスト教化が加速したとされる。顕著な事例はキリスト教主要教派に見られる退潮現象、とりわけ会員数の減少であろう。北米のプロテスタント教会の統計をもって例証すれば、一九六五年から一九八五年までの二十一年間に合衆国長老教会 (UPUSA: 一九八三年合同になる UPUSA と UPUS 双方の統計) で二八%、アメリカンバプテスト教会で三七%、聖公会で二〇%、組合教会系の合同キリスト教会 (UCC) で一九%、合同メソジスト教会で一七%の会員数減少が見られ、離脱会

員の過半数は三十才以下の年代層とされる。また、一九八五年以降の退潮現象も加速度を増すといわれ、合衆国長老教会の統計では一九九四～六年の会員数減少はそれぞれ三万三千、三万九千、三万四千弱であったとされる。^③「教会ばなれ」の中には棄教者や他宗教への改宗者も含まれようが、多くは他教派への転会者か「教会予備軍」としてキリスト教の枠内にとどまることになり、この間に躍進した福音主義諸教会への転出現象も顕著となる。

「教会ばなれ」現象と平行して教会の内面的な変化、とりわけ、聖書の基準からすれば異質のないしは異教的とみなされる宗教的あるいは疑似宗教的影響の教会内への浸透は危機的状况を生み出しているとされる。例えば、オックスフォード大学新約学者T・ライトによれば、今日教会を浸蝕する偶像的影響力としては古代ローマの軍神マルス崇拜に通じる対立・好戦的風潮、富の神マモン崇拜、エロスの愛の神アフロディテ（ヴィーナス）崇拜を反映する性道徳、地球神ガイア崇拜や汎神教に通じかねないエコロジー至上主義などがある。教会はこれらの影響力が三位一体の神礼拝のパロディでしかないことを認識し、パウロが説く「霊的戦い」（エペソ六10～20）をもって対抗する必要をライトは訴える。また、北米キリスト教界に顕著とされる影響力としては、財力をもって教会の成功度を判定し、宗教（教会）を商品化する「商業主義」（commercialism）、適者生存の原則に基づき教会新設を自由に試みるべしとする「起業家精神」（entrepreneurship）、会員のニーズを最大限に充足しうる「大規模教会」（megachurch）志向などは、「神は富者や成功者を祝福する」と唱えたカーネギーのポストモダン版「富者の福音」ともいえよう。

(2) 否定的状況への貢献度において最も重要な要因は伝統的教会論全般に対する批判的精神であろう。批判の対象としては聖書を始めとして、古代教会、宗教改革、「教会の世紀」二十世紀までの教会理解が視野に

入れられ、いわゆる聖域はない。関連して興味深い点は、ポストモダンにおける教会論の試みの一部に見られる、ポストモダンのキリスト教をそれ以前のキリスト教すべてから峻別する傾向である。例えば、教会史で古代、中世、宗教改革、近世と通常区分されるキリスト教を「古キリスト教」(Ancient Christianity)と総称してポストモダン・キリスト教と対比させる事例である。また、前者を「キリスト教社会」(Christendom)を前提とした時代とし、後者を「ポスト・キリスト教社会」(post-Christendom)と称したり、さらに前者を単純に「旧世界キリスト教」(the old world Christianity)、後者を「新世界キリスト教」(the new world Christianity)と呼ぶ試みである^⑤。このような試みの背景には、ポストモダンの教会が直面する状況はこれまでの時代とは類を異にする特殊とみなす理解があり、そこから伝統的教会論への批判が行われることになる。

ちなみに、先述の古代信条に見る「一つの、聖い、公同の、使徒的」という表現は、ポストモダンにおいては「多様かつ一つの」、「カリスマ的かつ聖い」、「公同的かつ地域的な」、「使徒的かつ預言者的な」に置き換えられるべきとの批判がある^⑥。また、宗教改革の共通遺産ともいえるルター派教会の基本信条『アウグスブルク信仰告白』(七条、教会)に対する宣教学からの批判もある。「教会は、聖徒の集まりであって、その中で福音が純粹に教えられ、聖礼典が正しく執行される」との告白文が、教会を受動的に「教えられ」、「執行され」るものと表現し、教会がその存立理由である使命(たとえば福音宣教)を能動的に達成するとの視点に欠けるとの批判である。また、宗教改革がキリスト教世界内部で行われたために教会の使命が内向的に理解され、すでにキリストの支配下にあるとされる「世界」への積極的関与という視点を欠く教会論となつたと批判される^⑦。さらに、ポストモダンからの批判は伝統的諸教会が告白する歴史的な教派信条すべてにも向けられることになる。この点に関して、世界福音同盟(WEF)の宣教委員会主催になる、宣教学をめぐ

る懇談会（一九九九）は『イグアス証言』（Iguassu Affirmation）を採択し、そこで福音宣教における教派を越えた協力を困難にする要因として諸教派における「不適切な神学、とりわけ教会についての教理」を挙げていることが注目されよう。^⑧

(3) 今日、脱キリスト教化された世俗社会において教会がどのように理解されるかは、歴史学、社会学、宗教学、政治学、心理学など多領域の関心事であり、当然それぞれの視点からの教会理解が成り立ち、それぞれを歴史的、社会学的教会論などと呼び、神学における教会論から区別する傾向も見られる。また、神学の領域においても三位一体論的、キリスト論的、聖霊論的、聖礼典論的（sacramental）、典礼学的（liturgical）教会論などと呼ぶ試みが多様に提起されている。一例を挙げれば、キリスト論的教会論に分類される「ケノーシス教会論」がある。これは、「キリストは神の御姿であられた方なのに、…ご自分を無にして」（ピリピ二6、7）におけるキリストの自己卑下（ケノーシス）の視点から、二〇〇一年九月十一日以降を二十一世紀の終末的世界と位置づけ、そこにある教会を徹底的に「十字架と回心」へと向かうものへと転換する必要を訴えた試論である。このような試みの多様化は教会理解の深まりに貢献すると同時に、単数形の「教会論」（ecclesiology）を問うことの妥当性など神学上の問題を提起し、複数形の「諸教会論」（ecclesiologies）に伴う混乱をもたらしかねないことにもなる。

2. ポストモダンの教会論に向けて

ポストモダンの到来をキリスト教会にとって危機ととらえるか、躍進の好機ととらえるか、また、それを敵対者とみなして対抗路線を採るか、それを避けては通れない現実とみなして適応路線を採って自己変革をはかるかは、今日の教会にとっての基本的選択といえよう。前者のアプローチは、諸教会が継承する伝統的教会論の弁証を促すことになろうが、その際、ポストモダンの影響が広く教会内に浸透している現実からして、この弁証が教会の現況とかみ合わない教条主義や表層的なあいまいさに陥る危険がある。とりわけ、従来教会がしばしば避難所としてきた「教会と世界」という二元論に陥ることは教会論の新たな形成に貢献するものではない。他方、後者のアプローチはその積極性は評価しようとしても、ポストモダンが多元主義を基本としていることからして、序論で触れた「改革された教会」という教会論形成における主体が見失われ、改革の規範や方向が曖昧となり、時代への安易な妥協に陥る危険をはらむものであろう。とはいえ、このアプローチは教会にとつて避けて通れない今日的課題であることは事実であるため、「二十一世紀における教会論の可能性」を問うことの意義はある。以下に、選択的にこのアプローチからの三例を紹介し、教会論の可能性への示唆を分析する。最初の二例は米国の主流教会からの試論で、第一が伝統的教会論とポストモダンとの接点を探りつつ教会の生き残りをはかるもので、第二が急進的にポストモダン教会論への転換を提起するものである。第三は、英国における青年伝道の経験を有する著者がその背景から、「固形体教会」(solid church)と「流動体教会」(liquid church)とを対比する斬新なアプローチをもって新しい教会論を試みるものである。

(1) 『死に直面する教会―ポストモダンの脈絡における教会論』(一九九九)の著者M・ジンキンズ(出版時点・合衆国長老教会教職、牧会経験を経てオースチン神学校準教授)は、先述の北米主要教会における退潮現象を「ある種の死」と認識することから教会論の再考を提起する。退潮現象に直面する教会がしばしば教勢挽回のために靈性の強調、時流の文化的要素の採用、起業家精神や商業主義に基づく伝道計画や組織作りなどに走り勝ちになる。このような一般的傾向に対して、著者は「脱構築」を唱えたフランスのポストモダン哲学者デリダ(Jacques Derrida)を引用しつつ、人は死に直面し、そこでは代人を採用できず、自己のみが死ななければならないことを認識して初めて「責任ある」(responsible)存在となれるように、教会も死に直面して初めてその真のあり方と自己認識(教会論)を新たにしようとする。この出発点こそは、教会がキリストのために苦難を受けるための十字架を取り上げ、犠牲となり、聖餐および洗礼論の意味合いにおいて死を体験することを示す。この出発点から著者は教会の性質(de-scribing church)、分類(taxonomies)、意味(speaking of church)など教会論のプレレゴメナ、方法論を展開する。

一例として、教会ということばを用いる時、それがなにを意味するのかを問う第四章を取り上げると、教会という「ことば」とそれが意味する「実体」との間には矛盾の関係があるとする。この関係は聖書が信仰者の集まりである「教会」を「キリストのからだ」と呼び、教会が語る「ことば」を「神のことば」とみなすことにも通じる。そして、それぞれの教会が教会とは何かを多様に語ることばと一つの、普遍的教会の実態との間にも同様の関係が成り立つ。そこで、教会論の第一義的目標を聖書から伝統的な普遍教会の理念や教会の定義と本質を演繹的に語るのではなく、多様な教会の自己認識、歴史的な個別教会を理解することに置く。この視点から著者は最終章「信仰告白―教会論序説」へと進み、そこでアウグステイヌス、東方教会教父、宗教改革などにおいて表明された教会論の再考を試み、最終的にはそれらの教会論の背後にある主体

がキリストであり、教会はそのキリストのしるし（サクラメント）であると結論する^⑩。

ジンキンズがその「あとがき」において認めるように、厳密に言えば本書は教会論序説であろうが、それを「ポストモダンの脈絡における教会論」と称する最大の理由は著者の立場が教会唯名論と呼べるもので、ポストモダンの多元主義とも合致して、個別教会の自己理解・表現こそがリアルであると見るからであろう。伝統的教会論が普遍教会の理解から始めたことに代わり、個別教会のリァリティーから始めて、普遍的な教会実態のしるし（サクラメント）としての教会を論じることが教会論プロパーを構成することになる。

(2) S・グラウツ・トドラック（ハーバード大学神学院卒、合同キリスト教会牧師）の『キリスト教変革——新宗教改革への十道程』（一九九六）は、自由主義神学の基盤の上にポストモダンが重視するヴァイタリズム（生氣論）、ホーリズム（全体論）、コミュニナリズム（共同体意識）などのテーマを加えて教会改革論を大胆に展開する一般書である。本書の基本的立場は、先にも触れた「旧世界キリスト教」と「新世界キリスト教」との急進的二分化と対立であり、近代までの歴史的キリスト教を一括して「旧世界キリスト教」とみなし、それと対比されるポストモダンへの適応を目指す「新世界キリスト教」への徹底した転換を「新宗教改革」と称することであろう。本書は「新世界キリスト教序説」、「新世界キリスト教における神と人格」、「イエスと新世界キリスト教」、「悪と新世界キリスト教宇宙論」の四章を内容とし、そこで広範囲にわたるポストモダンへの適応を試みるのであるが、本論との関係で教会を主題とする第三章のみを以下で概観する。

著者は第三章を「旧世界キリスト教」におけるイエス像問題から始め、伝統的な「信仰のイエス」（主、救い主、キリスト）像と啓蒙主義を継承した自由主義神学が提唱した「歴史のイエス」（道德の教師）像をいずれも不十分とし、パウロが第一コリント書で「さらにまさる道を示す」（十二31）として、「愛の章」十三章

を導入したことにヒントを得て、新世界キリスト教におけるイエス像を「慈愛の活きた擬人化」(the living personification of loving kindness)と定義する。この定義自体は、A・リッチェルが『義認と和解』についてのキリスト教的教説』(二八七〇〜四)において伝統的な、神の義と愛とを相関させるアンセルムスのキリスト論を退け、神の愛のみを強調するアベラルドウスのキリスト論を導入した自由主義神学の延長線上にあるが、著者の強調点は「活きた」(living)、「愛の」(loving)というポストモダンのヴァイタリズムに結びつけることにある。このイエス像から著者は以下の十項目を新宗教改革への道程として提起する。^⑩

1. 排他的から多元的へ
2. 位階的から民主的へ
3. 上からの神から内在の神へ
4. 教理的から直感的へ
5. 罪意識から愛中心へ
6. 肉体否定から肉体肯定へ
7. 参政権から預言者的へ (From enfranchised to prophetic)
8. 終末論的から生態学的へ
9. 分派から一致へ
10. イエスについての宗教からイエスの宗教へ

上記十項目はポストモダンの特徴である宗教多元主義や神の超越性に対する内在性の強調、さらにモダンが人間を理性と非理性、霊と肉、精神と肉体などと分けてとらえたことに対してポストモダンが人格としての全体的人間を強調し、その感情、直感、愛、肉体性などを重視したこと、また、自然とエコロジー(生態

学)への関心を強めたことを反映していよう。これらは教会論プロパーであるよりはそのスケッチに過ぎないとはいえ、ポストモダン教会論の特徴を簡潔に示している点で注目されうる。

(3) P・ワード(ロンドンのキングスカレッジ教授、大衆文化・神学の専門家)著『流動体教会』(二〇〇二)は本論のテーマに関する近年の出版物の中でも重要かつ刺激的な書物の一つであり、上述の二書に比べても教会の全体像を視野に入れた、堅実な教会論構築の試みである。その序論において、著者は時代の急速な変化への対応を迫られている今日の「教会は常に改革されなければならない」と提起するが、すべての対応や改革が正しいものとは限らず、また、理想とする「流動体教会」がまだ実現していないことからして、改革には適当な枠付けや方向性の必要を認める。本書の方法論は、伝統的な「固形体教会」と新時代の「流動体教会」の対比、後者への変革の必要、そして後者の神学的、社会学的分析を試みるのであるが、論述全般においてポストモダンの思考を採用している。まず、導入部の「固形体教会」の論述(一〜二章)において、著者は近代文化を論じるにあたり固形の近代性と流動的近代性があるとして、前者が秩序、規制、安定、単一を志向するのに対し、後者は急速に変化、進展する情報・技術文明に対応して、カオス、不確実、開放、多様、変化を志向するととらえ、この流動的近代性との関連で「流動体教会」を試論する。これらの対応を教会理解に当てはめれば、「固形体教会」では教会への参加度が信心深さの尺度となり、教勢や会計などのサイズ重視があり、近代のマスプロにつながる組織やサーヴィスの画一化が見られ、教会のクラブ(娯楽部)化が加速する。この教会がポストモダン時代に生き残りうるるとすれば、「流動体教会」への突然変異をしない限り、「伝統の維持」か、この世からの「避難所」か、過去への「ノスタルジア」を拠りどころとすることになる。

中心部にあたる「流動体教会」の論述では、第三、九章がこの教会の基盤と形成過程（「キリストにある流動性」、「流動体教会におけるネットワークと流れ」、「神の流動ダンス」、「流動体教会を形作る」、「流れの規制（その一）神のことば」、「神への渴望」、「流れの規制（その二）聖霊とめぐみ」）を扱い、最終第十章（「流動体教会の中で」）がこの教会自体の姿を描写する。流動体教会論の出発点はパウロの教会理解における「キリストのからだ」であり、「キリストにある」（in Christ）信仰者がキリストのからだに参与するという流動性にある。教会を神の民あるいは信仰者の会衆としてある特定の地域や場所と結びつける伝統的理解に代わり、社会的視点から教会を「キリストにある」信仰者が形成する「ネットワークと流れ」そのものにとらえ、そこでは変化に対応しうる信仰共同体、礼拝、宣教、組織についての新しい理論を作りうるとする。流動体教会にとっては、日曜日に会員が礼拝に一堂に会することは中心的ではなくなり、それに代わる会員間の自発的なコミュニケーションを母体とするネットワークと流れが教会の生命となる。また、教会のリーダーがこのコミュニケーションを統制する必要もない。著者はこのような視点から伝統的教会論が焦点としてきた教会と三位一体論、キリスト論、聖霊論との関係に対応して、「神の流動ダンス」（三位一体論）、流れの規制としての「神のことば」（キリスト論）と「聖霊とめぐみ」（聖霊論）を流動体教会の実相と結びつける。

とりわけ、興味深い一章は社会学的考察とされる「流動体教会を形作る」であろう。問題は欧米における教会ばなれ現象の結果として、「私は霊的（spiritual）であるが、教会に属するほど宗教的（religious）ではない」、あるいは「信じてはいるが、所属してはいない」とする人々をどのようにコネクトし、流動体教会に結びつけるかである。「我思う、ゆえに我在り」をもって近代（モダン）を拓いたデカルトの向こうを張って、「我買う、ゆえに我在り」を是とすポストモダンの消費者社会において、流動体教会は自らを「霊的市場」（spiritual marketplace）、そのでの買ひ物を霊的営みとみなし、決して霊的消費者を物質主義者と非難

することなく、彼らの希望、夢、願望を充たすための霊的商品を提供することになる。なぜなら、買う行為の背景には意義を求めることがあるように、霊的買物物の背景にも贖いや救いの可能性があり、最終的には宗教の商品化が可能であると見るからである。最終章において著者はこのような流動体教会はいまだ実現を見ていないとして、その理想を「夢」として語るのであるが、この教会を形作る過程は現実に進行中であり、その確かな手ごたえを感じていると思われる。

3. ポストモダンにおける福音主義教会論？

(1) 今日、福音主義 (evangelicalism) と呼ばれるグループなり運動なりを定義することは容易ではないが、大まかに言えば聖書に基づき、プロテスタント宗教改革にその教理的基盤を置き、敬虔主義の流れの中で台頭し、信仰覚醒運動の洗礼を受け、世界宣教運動を展開する中で二十世紀後半、とくにローザンヌ世界伝道会議において世界的に認知され、今日まで躍進を続けるグループといえよう。教会論に限定すれば、歴史的に福音主義には相反する潮流が共存することからして、単数形の「福音主義教会論」(evangelical ecclesiology) と呼びうる共通の教会理解の有無が問題とされてきた。通常、福音主義諸教会はそれぞれ伝統的な教派教会論を有する一方で、「教会内小教会形成運動」としての敬虔主義や個人の回心に力点を置く信仰覚醒運動においては教会論に低い優先順位を与えてきた事実からして、諸教会に共通する集合的教会理解は理想としてはあるとしても、現実と認めるには至らなかった。確かに、「教会の世紀」といわれる二十世紀においては福音主義は世界宣教運動を展開する中で教派教会論を越えた高い教会意識を育てたとされ、『ローザンヌ誓約』は宣教の主体としてのキリストの教会という集合的教会論を掲げることになった。しかし、

先に引用した『イグアス証言』が福音主義の宣教活動を阻害する要因として「不適切な神学、とりわけ教会についての教理」を問題としたことは、単数形の福音主義教会論をめぐる統一的理解がまだ実現していないことを示唆しているよう。

福音主義の前進は主流諸教会の退潮、およびそれら諸教会が積極的に参与したエキュメニカル運動の後退とポストモダンの台頭と時期を一つとする。この事実は、S・J・グレンツがその論文「ポストモダニズムと福音主義の将来」において指摘したように、福音主義がポストモダンにある程度対応することができ、むしろ新時代の挑戦を受けつつ前進しうることを示唆している¹³。グレンツの主旨は、モダン批判という観点から福音主義はポストモダンと基本的な合意があり、理性を超えた真理や信仰による認識の重要性を強調できるとするものである。ちなみに、福音主義は「ポスト個人主義」であり、ポストモダンが強調する共同体意識を共有しうるし、「不合理」(irrational)であってはならないが、「非合理あるいは超合理」(non-rational or supra-rational)の宗教的真理や霊性を強調しうるとする。しかし、グレンツの論考は福音主義教会論とポストモダンとの関係は視野には入っていない。むしろ、この関係からすれば、ポストモダンの宗教多元主義が元来多様な教会理解を内包する福音主義に影響を及ぼし、時代への対応を試みる福音主義諸教会に多様なハイブリッド(雑種)的諸教会論の誕生が見られるのが現状であろう。ポストモダンにおける福音主義の前進の陰で、単数形の福音主義教会論の可能性は遠のいていると見るべきなのであるか。この問いへの回答は本論の視野を越えるものではあるが、以下に伝統的教会論の再考を含めた福音主義教会論の可能性をめぐる試みとこの問いに関しては最も研究が進んでいるとされる宣教学からの取り組みに触れて本論を閉じることにする。

(2) J・G・スタックハウス編『福音主義教会論―現実か幻想か?』(二〇〇三)は本テーマに関する最新出版物の一つで、現役で活躍中の福音主義神学者九名の論文を収録している。その構成としては、第一論文(D・ヒンドマーシ「福音主義教会論は撞着か?」)が福音主義における超教派的、国際的アイデンティティにもかかわらず、それが一つのユニークな教会論へと発展しうるのか、と問題提起し、最終論文(R・ビートン「教会を再想像する―福音主義教会論の可能性に向けての更なる研究を訴える。これら両論文の間に「三位一体論的、聖礼典論的教会論」、「教会のしるし」、「一つの、聖い、公同の、そして使徒的教会」、「自由教会教会論」、「十字架の教会」など伝統的教会論が取り組んできたテーマの再考と福音主義教会論の可能性が問われる。紙面の都合もあり、以下にH・A・スナイダーの「福音主義教会論におけるしるし」と宣教学の背景からG・R・ハンズベルガーの「宣教的教会論への福音主義的変革」との二論文への言及にとどめる。^④

スナイダー論文は、現代アメリカの福音主義陣営には福音主義的な諸教会論が現実にある事実を踏まえた上で、伝統的なしるし論(古代教会の「一つの、聖い、公同の、使徒的」や宗教改革のみことば、聖礼典、教会訓練、など)の再考をもって福音主義教会論の可能性を問う。伝統的キリスト教が「組織化された機構」(organized institution)を前提としたために上で触れたしるし論が可能であったとしても、ポストモダンが「有機体的運動」(organic movement)としての教会を前提とするため、福音主義においては先述のように「一つのかつ多様な」、「聖にしてカリスマ的な」、「公同かつ地域的な」、「使徒的かつ預言者的」しるしを有する教会と理解する必要があるとする。結論として、著者は北米における今日の福音主義に見られる諸教会論を「宗教改革により濾過されたローマ・カトリック教会論の伝統、自由教会とリバイバル運動の伝統、さらにアメリカの民主主義と起業家精神により培われた多様な雑種現象」と定義し、この事実のゆえにこそ「福

音主義に特有な伝統である福音主義教会論と呼べるものが確かにありうる」とし、これが今日いまだ形成中であるとする。

ハンスベルガー論文は、教会の性格は基本的に「宣教的」(missional)であるとの認識に立つ教会論こそがポストモダンにおける教会の自己認識にとって決定的意義を有するとして、諸教会に「宣教的教会論」(missional ecclesiology)への変革 (conversion) を訴えるものである。この教会論は、伝統的教会論が内向的であったのに対して、教会を神の国を代表する、世界への宣教に派遣された民と理解する。そして、この派遣は教会が宣教師を派遣する団体となることではなく、自らを宣教的共同体へと変革することを意味する。論者はさらにこの変革の過程、とりわけポストモダンとの関わりにおいて障害となりうる課題を取り上げる。例えば、論者はしばしば福音主義のアキレス腱といわれる個人主義および回心体験や信仰上の選択の重視を「消費者の自由選択」原則に基づく宗教的商業主義と通じるものとみなし、それに対して「宣教的教会論」は宣教的共同体意識を教会に回復し、神の国が信仰者を取り巻く全生活領域における変革をもたらすことを強調する。結論として、教会が「この世における神のミッションに導き入れられた者」との自己認識に立ち、積極的に神のミッションに参加することがこの変革の要であるとする。

(3) D・L・グーダー著『教会の継続的改変』(二〇〇〇)は宣教学の視点から教会改革を論じるもので、厳密な意味での教会論の書ではないが、ポストモダンにおける教会論の可能性を考察する上で多くの示唆を提供する書である。著者は長老派の宣教学者、神学校教授で前著『私の証人であれ』(Be My Witnesses, 一九八五)の著者としても広く知られる。本書の構成としては、教会の基礎としての「神の派遣」(一〜三章)、教会の重要課題としての改変の必要性(四〜六章)、地域教会と制度教会における改変過程(七〜八章)を総

括的に扱うのであるが、重複を避けるためにも、第六章「救いと宣教の縮小化」と第七章「教会の改変―地域教会」の二章に限定し、著者の主張点を簡単に見ることにする。^⑤

本書で著者が一貫して主張する点に「縮小(化)」(reduction, reductionism)の問題があり、それとの対応が教会理解の上で重要課題とみなされることがある。この視点からの著者の伝統的教会理解批判は広範囲にわたり、たとえば、プロテスタント宗教改革に対してでも手厳しい。宗教改革は神のことばの権威と説教を教会の中心に据えることで貢献したものの、義認論を基礎に教会を築いたため、全世界への神のミッションとしての教会という視点を欠いた「救済縮小化」の過ちに陥り、続く啓蒙主義も信仰の個人主義化をもって福音の目的を幸福の追求とすり変える「縮小化」をしたと批判される。さらに、ポストモダンの今日「縮小化」現象は顕著となり、新会員の獲得と新教会設立計画が宣教や伝道の目的と縮小視され、極端な場合には伝道のみを目的とする教会の出現が目立つことになり、福音をそのすべての広がりにおいて全世界に伝えるという視点が失われる。結局のところ、教会の使命は秩序の維持、制度の保全、権力の保持に終始する危険が広く見られことになる。

著者によれば、教会の宣教的使命遂行のために地域教会が重要な器であることは言うまでもないが、地域教会の継続的改変のためには福音に聞くのみならず、斬新で、総括的な方法をもって福音に従うことが求められ、そこではいかなる「縮小化」も避けなければならない。礼拝スタイルに一例をとれば、「伝統的」、「時流的」、「両者の混合」などと盛んに論じられているが、これが「礼拝者を楽しませる」、「彼らの要求を充たす」、「時流に対応するために必要」などが主要因となり、教会のミッションという視点が見失われて決定がなされる場合には、そこに縮小化が生じる。同様に、福音宣教を人々をキリストの弟子として神の国へ導き入れることであるよりは、良い教会員を生み出す手段とみなすことも縮小化につながることになる。地域教

会にとつての恒常的かつ深刻な誘惑は、神の国の福音が提示する十全性を経営しうる宗教に縮小し、宗教グループとしての存続を教会の主要目的とすることに他ならない。

註

- ① O.Dibelius, *Das Jahrhundert der Kirche*, (Berlin, 1927).
- ② Cf. S. Glauz-Todrank, *Transforming Christianity: Ten Pathways to a New Reformation* (New York: Crossroad, 1996) ; D. L. Guder, *The Continuing Conversion of the Church* (Grand Rapids: Erdmans, 2000).
- ③ M. Jinkins, *The Church Faces Death: Ecclesiology in a Post-modern Context* (Oxford: Oxford U.P., 1999), 10.
- ④ T. Wright, *Bringing the Church to the World* (Minneapolis: Bethany House, 1992), 152-174, 186.
- ⑤ K. Tanner & C. A. Allen eds., *Ancient and Postmodern Christianity: Paleo-Orthodoxy in the 21st Century* (Downers Grove, Ill.: InterVarsity Press, 2002) ; Glauz-Todrank, *Transforming Christianity*.
- ⑥ H. A. Snyder, "The Marks of Evangelical Ecclesiology," in J. G. Stackhouse, Jr. ed., *Evangelical Ecclesiology: Reality or Illusion* (Grand Rapids: Baker, 2003), 85-7.
- ⑦ J. Bosch, *Transforming Mission: Paradigm Shifts in Theology of Mission* (Mary Knoll, NY: Orbis, 1991) 249; W. R. Shenk, *Write the Vision: the Church Renewed* (Valley Forge, Pa.: Trinity Press International, 1995), 38.

- ⑧ G. R. Hunsberger, "Evangelical Conversion toward a Missional Ecclesiology," in *Evangelical Ecclesiology*, 116.
- ⑨ J. W. DeGruchy, "Re-forming Congregations in a Time of Global Change: Toward a Kenotic Ecclesiology," *The Princeton Seminary Bulletin*, 27:1 (2006), 61ff.
- ⑩ Jinkins, *Op. cit.*, 9-32, 69-84, 85-101.
- ⑪ Glanuz-Todrank, *Op. cit.*, 65-103.
- ⑫ P. Ward, *Liquid Church* (London: Paternoster Press, 2002).
- ⑬ S. J. Grenz, "Postmodernism and the Future of Evangelical Theology," *Evangelical Review of Theology*, 18:4 (1994), 322-334.
- ⑭ Snyder, "Op.cit.," and G. R. Hunsberger, "Op.cit." in *Evangelical Ecclesiology*, 77-103, 161-178.
- ⑮ Guder, *Op. cit.*, 120-141, 145-180.